

# 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	金 志成
論文題目	対話性の境界—ウーヴェ・ヨーンゾンの詩学
<p>審査要旨</p> <p>本論文は戦後ドイツを代表する作家ヨーンゾン (1934-1984) の詩学にバフチン／ド・マンの「対話性」の観点から迫った研究である。分断国家という政治的な主題とモダニズム的技法意識を併せもつヨーンゾンの詩学は90年代に注目されたものの、作家がカノン化された現在では研究も飽和し実証研究が中心になっている。本論文の功は、新たにポスト構造主義や脱構築主義の立場から、詩論エッセイと小説作品にパフォーマティヴに呈示された詩学的要素を取り上げた点にある。論文は2部全7章により構成され、第1部の4章では、エッセイや講演などに焦点を当て、「詩学」、「対話性」、「パフォーマンス性」、「現代性」をキーワードに論じている。</p> <p>「詩学」概念について理論的に検討した第1章では、ロマン派時代に解消したとされるドイツの「詩学」が、20世紀の後半に復権したものの、規範性はすでに失い、政治的・歴史的な現実生きる個別作家性の刻印を受けている点が確認された。そしてヨーンゾンにおいて、東西ドイツの「国境」という政治的境界が詩学と詩作の「境界」、経験的現実とフィクションの「境界」、作者と語りの審級の「境界」、さらに言語的分節化の「境界」にまで敷衍される可能性が示された。詩論『ベルリンのSバーン』(1961)に焦点を当てる第2・3章では「語りの全知性への疑い」というヨーンゾン研究のトポスが再考された。これはデビュー小説『ヤーコブについての推測』の推量文体を説明するのに濫用されてきたが、構造主義的な物語論の立場から矛盾を指摘されたものだ。本論文は、作者の特権を剥奪し登場人物の「他者性」を考察したド・マン (「ダイアログとダイアログ性」) に即して、作家が「人物」と対話をするという積極的な契機をそこに見ている。「真実探求」という作家のプログラムについても、フィクションにおける「真実」という逆説が問題視されてきたが、本論文はヨーンゾンが「大文字の真実」を語る＝騙るイデオロギー言説を批判し、複数の「部分真実」同士の対話に賭けていることを説得的に論じた。ただし、ここに「語りの倫理」を見出す先行研究とは距離を取り、ヨーンゾンの「大文字の真実」批判には言語をめぐる脱構築的な問題意識があると論証した。第4章は、詩論『長篇小説を検討するための諸提案』(1975)から「モダニティー」の問題を抽出した。「新しさ」のうちに根源的な性格があるとするヨーンゾンがベンヤミン経由でボードレールを受容していた可能性を指摘して、「コレスポンダス」と「アレゴリー」という両極的な契機の緊張関係こそヨーンゾン詩学の要であることを明らかにした。こうした理論的考察を踏まえて三冊の小説作品を分析する第二部では、まず『ヤーコブについての推測』(1959)における「対話性」の問題に焦点を当てた(第5章)。ヨーンゾンの小説にバフチンのポリフォニー理論の応用を試みた先行研究を発展させ、内的モノローグにさえも対話的な契機が見出されることを示した。さらに、対話性そのものの「境界／限界」が恋愛のディスカールのなかでパフォーマティヴに露呈する瞬間としてヤーコブの恋人ゲジーネのモノローグが分析され、小説全体において例外をなすこの超言語的な状態にこそ作家の文学的創造力がもっとも発揮されている点を示した。「コレスポンダス」が持続せず、やがてゲジーネとヤーコブの関係はそれぞれ〈西〉と〈東〉の「アレゴリー」を相手に見ることで破局にいたることから第一部の理論的なテーゼも立証された。ゲジーネの少女時代が描かれる短篇小説『イースターの水』(1964)を『ヤーコブについての推測』から後期作品を接続させるものとして取り上げ、「波」のモチーフに「対話性」の破綻のモデルをみた第6章につづいて、いよいよ第7章では、代表作『記念の日々：ゲジーネ・クレスパールの生活から』(1970-1983)が取り上げられる。1967年から68年にかけての「一年」、世界史的な転換の年を対象とすることで、一回的な性格を持ちながら、「一年」は過去における同じ日付の記憶</p>	

氏名 金 志成

を蓄積していてもいる点に注目して、本小説の主人公ゲジネの想起をつうじて現在と過去が相互反応的に入れ替わる物語構造が「記念の日々＝一年の日々」というコンセプトの一回性と反復性の弁証法的運動に対応していることが示された。さらに、ヨーンゾン自身が「同志作家」として作品世界に登場するというメタフィクショナルな設定を踏まえて、現実とフィクションの「境界」、英語と標準ドイツ語間の「境界」を架橋する介入的な「翻訳」によって境界的な言語状況を可視化している点が明らかにされた。そして「同志作家」、ゲジネの娘マリー、人格化された「ニューヨーク・タイムズ」、「死者たちの声」の四者を対話性の詩論的形象とみなし、それぞれの機能が分析された。なかでも先行研究が重要視してきたのは「死者たち」との対話であるが、本論文は、ゲジネ自身が「わたしが死んだための」という想定のもとと言わば仮想的な死者となってテープレコーダーに遺言を吹き込む場面で、まさにこの対話的な図式が崩れる瞬間に着目し、キットラーのメディア論を援用しつつ、言語的な分節化＝発音（Artikulation）の限界とヨーンゾンの詩論的プログラム「真実探求」の関係を説得的に論じた。

審査においては以上のように論点が整理された上で、まず各審査委員から総評が加えられた。専門外の読者への配慮も行き届き、ドイツ語圏のみならず、英米圏の先行研究を広く渉猟し、その達成点を的確に整理した上で、構造主義的なアプローチによったこれまでの研究の限界を指摘して、エクリチュールのレベルに現れる破綻や死角を丁寧なテキスト分析によってオリジナルな立論を説得的に展開していく見事な手際に審査委員が一致して賛辞を贈った。その上で、質疑応答に移り、詩学を問題にしながらもっとも明示的な詩学が語られている第二小説『アヒムについての三冊目の本』を分析対象から外した妥当性、同時代のドイツ文学の詩学（ヴォルフ、バッハマン、ハントケ）との比較可能性とヨーンゾンの突出した点、とりわけ『記念の日々』の物語構造における斬新さについて議論されたほか、本論の概念装置「対話性」「境界／限界」「詩学」や「言語ゲーム」の概念規定についての詳細な検討を経て、本論が方法論として援用している脱構築的手法についてスリリングな議論が展開された。脱構築はいかなるテキストに対しても適応可能な読解の原理であるべきなのに、ヨーンゾンの「詩学」を論じるというテーマ設定上やむをえぬにしても、作家サイドから論じて、伝統的なテキストモデルを追認する形でアプローチし、「対話性」に規定されたテキストが一瞬だけ破綻する箇所へのみ目を向けることに対する疑義も出された。これらの論点について、論文提出者はひとつひとつ真摯に応答して、結果的に論点が補強され論文の説得性がいや増すこととなった。

会場を交えた議論を経て、審査委員会は別室で協議し、質量ともに優れた本論文が、構造主義的な物語論に依拠することの多かった従来のヨーンゾン研究を方法論的にも乗り越え、国内外のヨーンゾン研究はもとより、戦後ドイツの詩学の研究にも新たな視座を用意することが大いに期待できることから、博士学位を授与するにふさわしいものだという判断を全員一致で下した。

公開審査会開催日	2018 年 1 月 25 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	山本 浩司	ドイツ文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	松永 美穂	ドイツ文学	
審査委員	東京大学大学院総合文化研究科 准教授	竹峰 義和	ドイツ思想・映像文化論	博士(東京大学)
審査委員				
審査委員				